



佐藤重徳 | 府中の住宅 [2006]

Sigenori Sato

中村好文 — イラストも

Yoshifumi Nakamura



吹き抜け上部の通路から見おろしのツーショット。佐藤くんが「質問は、まだかなあ？」と私の様子うかがっている

32歳で独立しようと決めたとき、私は自分の事務所に個人名を冠せず「レミングハウス」としました。レミングはスカンジナビア半島に棲息するねずみの一種ですが、このねずみは大移動する習性があることから「旅ねずみ」という和名が付けられています。レミングハウスという名称は、私の干支が子年であることと、無類の旅好きであることに引っかけた命名でした。

独立して10年ほど経ったころ、私のひとまわり下の子年で、旅好きのスタッフが入所しました。このスタッフが今回ご紹介する「府中の住宅」の設計者、佐藤重徳くんです（「さん付け」ではよそよそいので、今回は「くん付け」で呼ばせてもらいます）。

佐藤くんは1991-97年までの6年間、私の事務所に在籍した後、独立しました。そしてこの間に、私と佐藤くんは、日本国内だけでなく、アメリカ、フランス、イタリア、チュニジア、ネパール、パリなど世界各地と一緒に旅行しました。指折り数えてみると、6年の間に13回、つまり半年に一度の割合で海外旅行をしていた勘定になります。この中にはレミングハウスの研修旅行（社員旅行）や、取材旅行もありましたが、まずはレミングの名に恥じない回数と言ってもいいでしょう。



【建築概要】 名称: 府中の住宅 | 所在地: 東京都府中市 | 家族構成: 夫婦+子供2人 | 敷地面積: 105.80m² | 建築面積: 52.22m² | 延床面積: 124.16m² | 規模: 地上3階 | 構造: 薄肉壁床ラーメン・壁式RC造 | 設計: 佐藤重徳

2枚の壁で内部空間をサンドウィッチする構成は、はっきりとファサードに表現された北側外観

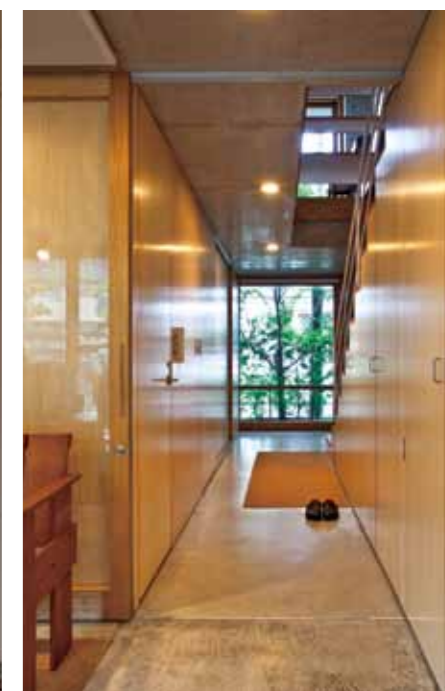
その佐藤くんが独立後、自邸を計画していると聞いて、私は完成を楽しみにしていました。自邸にはその建築家の思想、信念、経験、憧れ、技量、美学、こだわり、思い入れ、人生観…などなど、すべてが顕れるものですが、長年の付き合いでよく知っているつमोरの佐藤くんが自邸の設計にどのように取り組み、これまでの仕事を踏み台にしてどんな新しい展開を見せてくれるのか、元・ボスとしては興味津々だったのです。

その「府中の住宅」が完成したのは2006年です。これまでに私は、

何度かこの住宅を訪れていますが、今回の訪問は「Architect at Home」の取材なので、あらためて隅々までじっくり観察し、気になるところがあれば、根掘り葉掘り話を聞き出そうと心に決めて出掛けて行きました。ところが、実際には「じっくり観察」も「根掘り葉掘り」もせずじまいでした。私はいつもの調子でとりとめのないお喋りをし、出されたビールをグビグビ飲み、志乃さん（佐藤くんの奥さんです）の美味しい手料理をご馳走になって帰って来てしまいました。こう書くと、おつかいに行つて手ぶらで帰ってきた子供のように思われそうなので、ひとこと、言いわけをさせてもらおうと、「府中の住宅」は、コンセプトは



居間から吹き抜け越しに南側バルコニー方向を見る。竣工時にはなかった円筒形の暖炉が入り、冬の団らんの楽しみが増えた。南側の二層ある大きな開口部は木製サッシ



玄関を入ると、通路は奥へ奥へとまっすぐに伸びていく。この玄関にはいわゆる上がり框はなく、適当なところで靴を脱ぐフッジーな感じが好ましい



2枚の壁で内部空間をサンドウィッチする構成は、はっきりとファサードに表現された北側外観

明快だし、プランや空間の構成も非常にダイナミック、かつ、簡潔にできているので、今さら重箱の隅を突つくようにジロジロ見まわしたり、設計意図を懇切丁寧に解説してもらったりする必要がなかったのです。そんなわけで、取材に行った私が、家についてまったく質問をしないで、ビールを飲んで雑談にふけているので、佐藤くんはさすがに不安に思ったのか(または、業を煮やしたのか)、土地取得から設計を経て着工するまでのいきさつなどを問わず語り話してくれました。それが、いかにも生真面目な佐藤くんらしい興味深い話だったので、以下、紹介したいと思います。

府中近辺に自宅を建てようと一念発起した佐藤くんは、土地探しにあたって、あらかじめその周辺の土地の相場を頭に入れた上で、予算内で手に入れることのできる土地の大きさとその形状を予測します。そして、用意周到な彼は、その架空の敷地の法的条件(建坪率、容積率、斜線制限など)に適合する3階建ての建物を設計した上で、土地探しをはじめたのです。それには次の理由がありました。土地というのは、一生に一度の大きな買い物になるかもしれないのに、「これは!」と思う物件に出合ったらずに決めて、手付け金を払うなり、契約するなりしないと、逃してしまう恐れがあります。つまり、即断即決しなければならないわけですが、佐藤くんは、その土地にどんな建物が建築可能かをじっくり検討する時間のないまま、見切り発車的に売買契約を結ぶのはリスクが多すぎる…と考えたのです。で、事前に設計しておき、予算に見合う気に入った土地が出たら、あらかじめ用意しておいた図面をその土地に重ね合わせて「買う・買わない」の判断をする、という方法を採用したのです。

この話を聞きながら、私は「あれ?、この話、どこかで聞いたことがあるな」と思ったのですが、あるもある、この話はあのル・コルビュジェの「小さな家」という本の中にありました。コルビュジェは両親のための老後の家を建てようと思い立って土地探しをしましたが、そのとき、建てるべき家の図面をポケットに入れて持ち歩いていた、というあの有名な話です。

「敷地に先立った設計ですって? そう、その通り。この家に適した

敷地を見つける計画だったのだ」とコルビュジェは書いていますが、期せずして佐藤くんも、80年前、20世紀の建築界の巨匠がレマン湖の畔^{ほとり}でしたことを、東京の西端、府中市でしたことになるわけです。そして、ある日、彼はとうとう「これだ!」という土地に出合います。ここでもう一度、コルビュジェの言葉を借りると、佐藤くんの出合った土地は「プランを敷地に合わせてみると、まるで手袋に手を入れるようにぴったりとしていた」そうです。

ここまでは、佐藤くんの思惑通り、計画通りでした。架空の基本設計案がそのまま使えたわけですから、設計期間は大幅に短縮できました。実施設計は快調に進み、確認申請を出し、許可さえ下りれば、いざ着工というところまで漕ぎ着けて、年末年始を迎えました。そして、ここまで来たときに、流行の言葉で言うところ「想定外のこと!」が起きました。お正月休みにお屠蘇気分^{はやり}で完成した図面を眺めていた佐藤くんの太い眉がピクリと痙攣し、眉間にしわが寄りました。突然「このプランはあの敷地に相応しいだろうか?」という疑念が頭をもたげたのです。あらためて敷地の様子を想い描き、もう一度その敷地の上にプランを置いてみると、「なんということでしょう!」これが、まるでチグハグに思えてきました。着工目前のプランは、この敷地の最大の特徴である南と北が公道に面している「抜けの良さ」をまったく生かしていなかったことになり、佐藤くんはこのことに気づいて、愕然としました。このときばかりは「心臓がドキドキしました」と、佐藤くんは述懐しています。そして、煩悶の末、大幅に設計変更するしかないという覚悟を決めました。ただ、その前に、念願のピアノのレッスン室付きの新居を心待ちにしているピアニストの妻の志乃さんに、プランのやり直しをしたいのもう少し時間が欲しい、と頭を下げて、完成が遅れることを了承してもらわなければなりません。大変更に伴う工務店その他各方面への多大な迷惑もさることながら「そのことが一番大変でした」と、愛妻家の佐藤くんは、しみじみとした口調で言います。

「府中の住宅」はそんな顛末があったことなどおくびにも出さず、穏やかな表情で街並に溶け込んでいます。この住宅を訪れる人は、



玄関脇にある志乃さんのピアノ室。天井の吸音ボードと床の吸音敷物を施工して、ピアノ室は2年前に完成。家は刻々と変化⇒進化している



3階通路から子供室方向を見る。子供室の手前に勉強コーナーがあり、そこには天窓から終日、柔らかな光が降り注いでいる



2階に上がると、右手正面に打ち出しコンクリートの大きな壁面が目飛び込んでくる。この吹き抜け空間とドーンと大きな壁が、佐藤家の日々の暮らしを包み込み、見守り、安堵感を与えてくれていることがはっきりと感じられる

東西の敷地境界に差し込まれた2枚のコンクリート壁が、南北に抜ける方向性を強調し、ふたつの道路を意識的につなぐ空間装置として効いていること。北側の玄関ホールを入るとその意識に先導されるように、通路もそのまま、まっすぐに伸びて南側に突き抜けること。北側の玄関先と南側の庭に植えられたシマトネリコは、玄関ドアを開けた瞬間に長い通路越しに対面し、「やあ!」と挨拶を交わしているように思えること。鉄砲階段を上りきったとたん、真正面に幅7メートル、高さ5メートルのコンクリート打ち出しの大きな壁が出迎えてくれること。また左手方向を見上げると、スリット状に切られた天窓から柔らかな光が滑らかなコンクリートの肌を舐めながら降り注ぎ、室内に穏やかな安らぎを与えていること…などを目のあたりにすることになり、そうした建築的なアイデアが、この住宅で営まれる佐藤家の暮らしを、優しく、大らかに包み込んでいることに気づくのです。さらに注意深い人は、この住宅は、分厚いコンクリート壁以外の木製間仕切りが、「壁」ではなく建具サイズの厚さの「パネル」できていることを発見するでしょう。こうした細部^{ディテール}にも佐藤くんの細心の心配り

と建築的なセンスが感じられます。

ところで、私は、この住宅は2枚の壁を最大のテーマにしなが、西側の壁が1階と2階でわずかに膨らませてあることに特別に興味をひかれます。壁を強調したい住宅なのですから、本来なら壁は平板でありたいのですが、そうなっていません。佐藤くんは、コンセプトを強調しすぎることで、建物が理屈っぽくなるのを避けたのです。建築作品としての純度を上げることより、「住宅は暮らしの器である」という観点に立って、生身の人間の暮らしを尊重したことになります。実際的にもこの膨らみのおかげで、通路はゆったりした幅を獲得できましたし、たっぷりした収納も確保できて、住宅としての使い勝手は格段に上がりました。

ロバート・ヴェンチュリーは「建築の多様性^{べいばん}と対立性」という本の中で「研ぎ澄まされたものより折り合いを付けたものの方が、デザインされたものより月並みなものの方が、好きだ」と書きましたが、「府中の住宅」の壁の扱いにおいて、佐藤くんがヴェンチュリーの考え方に与^{くみ}したことを、私は高く評価したいと思っています。

なかむら・よしふみ——建築家/1948年生まれ。

武蔵野美術大学建築学科卒業。1972-74年、宍道設計事務所。1976-80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。

主な作品:三谷さんの家[1986]、REI HUT[2001]、伊丹十三記念館[2007]など。

主な著書:「住宅巡礼」[新潮社/2000]、「住宅読本」[新潮社/2004]、「意中の建築 上・下」[新潮社/2005]、「Come on-a my house」[ラトルズ/2009]、「普通の住宅、普通の別荘」[TOTO出版/2010]など。